

★成熟期の高温の影響により収穫適期が前進！

★カメムシ類被害も多く、次年度も防除の徹底を！

1 今年度の君津地域の水稲の生育を振り返って

平年に比べて、3月22日～28日の気温は高く推移しましたが、3月29日～4月3日は気温が低い日が続き、発芽の遅れや苗の生育に影響がありました。その後の気温は平年並み～高い日が多く、苗は順調に生育しました。4月下旬以降、気温は平年並み～やや高く推移したことから、移植後の苗の生育は順調に進み、草丈は平年並み～やや高く、茎数はやや多い～多い傾向になりました。

5月下旬は気温がやや低く、寡照条件で推移しました。「ふさおとめ」、「コシヒカリ」では平年に比べて草丈はやや長く、茎数は平年並み～やや多い傾向になりました。6月中旬以降は気温・日照時間ともに平年より高く推移したため、生育が早まり、幼穂形成期が平年より1～2日程度早くなりました。7月以降も高温条件が続き、「コシヒカリ」は出穂期が平年より5日早まりました。

成熟期について、「ふさおとめ」は8月6日頃から、「ふさこがね」は8月8日頃から、「コシヒカリ」、「粒すけ」は8月22日頃からとなり、いずれの品種も平年より早い収穫を迎えました。

2 今年度の君津地域の作況単収概況について

関東農政局発表の本県の作況単収指数（10月25日現在）は「101」であり、平年並みの数値となっています。君津地域を含む南房総地域も「101」でした。

品質について、斑点米カメムシ類の吸汁被害による斑点米や高温による白未熟粒の増加による等級の低下が目立ちました。

3 来年度に向けて

（1）高温対策

地球温暖化の影響により、水稲の生育期間に当たる3～8月の平均気温は上昇傾向にあります。気温が高くなると、水稲の生育ステージの前進化による管理の遅れ、初期生育が旺盛となり過剰分げつ・倒伏リスクの増加、白未熟粒発生等の影響を受け、収量・品質の低下を招きます。

これら高温障害への主な対策としては、①秋耕による稲わらの分解、②ケイ酸施用、③葉色に応じた追肥の施用、④適切な水管理、⑤高温登熟耐性品種の導入が挙げられます。

前年作の稲わらの分解が不十分だと、メタンガスの発生（ガスわき）を助長し、根痛みによる生育阻害を引き起こします。根の伸長・活性は高温障害の抑制につながるため、秋耕を実施しガスわきを抑えましょう。移植後のガスわきが多い場合は一時的に落水し、ひどい場合は溝切りの実施により土壌中に酸素を供給してください。

続いて、ケイ酸は稲の茎葉の強さを高めて倒伏軽減が期待できるほか、根張りを良くすることで高温障害の軽減効果も期待できます。

また、出穂期に葉色が低下すると白未熟粒が増加する傾向があります。出穂期前7～5日（穂ばらみ期）に葉色が淡く、登熟前半の高温が予想される場合は、窒素成分で1kg/10aを上限に追肥を検討してください。ただし、基肥一発肥料を使用している場合は、使用した肥料の溶出タイミングを確認し、過剰施肥にならないよう注意してください。

水管理については、中干し後は「間断かんがい」を行い、出穂期3週間前から出穂期2週間後までは「湛水管理」を行います。その後は「間断かんがい」を実施し、落水は出穂期25日後以降とし、限りある水資源を有効に活用し玄米品質の低下を防いでください。

この他、「ふさおとめ」は高温登熟耐性が高い品種となっており、今年の高湿条件でも他品種に比べて1等比率を高く維持しています。自身の作付計画を見直し、高温登熟耐性品種の導入も検討してください。

（２）斑点米カメムシ類対策

近年、気温の上昇と作期拡大に伴い、斑点米カメムシ類の発生量が多くなっており、吸汁被害による不稔籾や斑点米の発生が多く確認されています。特に早生品種では被害が多く、品質低下の主要因にもなっています。斑点米カメムシ類の多くは水田周辺に生息していた成虫が水稻の出穂後に水田に侵入します。水稻の被害を軽減するためには、水田周辺の草刈りを適切に実施することが重要です。出穂期前後の草刈りは、斑点米カメムシ類を水田内に追い込んでしまい、斑点米の発生につながります。畦畔の除草作業は出穂期の 2 週間前程度までに済ませましょう。



図 1：イネカメムシの成虫（茶色）

一方、斑点米カメムシ類のうち、近年特に発生量が増加している「イネカメムシ」については、水田内に直接飛来してくるため、畦畔の除草作業は効果がありません。斑点米カメムシ類の被害が多発している地域については、薬剤散布による防除も併せて実施しましょう。イネカメムシに対しては、早めの防除が必要で、成虫が飛来を始める出穂期前にスタークル粒剤やキラップ粒剤等粒剤を散布するか、成虫が多く飛来する出穂期のスタークル液剤 10 やキラップフロアブル等の液剤散布が効果的です。さらに、乳熟初期（出穂期 7～10 日後）にその他斑点米カメムシ類を含め幼虫が多い場合は追加散布（出穂期頃に散布した剤とは異なる剤を選択）の実施が効果的です。

（３）イネばか苗病対策

イネばか苗病菌は、収穫した稲わら、米ぬか、籾殻等に存在し、翌年の伝染源となります。イネばか苗病の発生が見られたほ場では、稲株をすき込んで土中に埋没させることで菌密度を下げるができます。また、浸種、催芽、播種等といった、種もみを扱う作業場が汚染されていると、イネばか苗病が感染してしまう可能性があります。育苗箱はイチバンで消毒し、作業場やその周辺はよく清掃し、稲わら、米ぬか、籾殻などが無いように清潔に管理しましょう。

種子消毒を行う際には、化学合成農薬を使い、農薬のラベルに記載されている希釈倍数や処理時間などの使用方法を守ってください。また、消毒時の水温は 10～15℃の範囲とし、浸種時の水替えは静かに行うよう注意してください。減農薬栽培に取り組まれるなど、微生物農薬を使用する場合は、温湯消毒と組み合わせることをお勧めします。

水稻採種ほ場の周辺 200 メートル以内に一定割合でイネばか苗病が発生しているほ場があると、収穫したもみは種子として扱えなくなってしまう。君津地域は県内で有数の種子産地です。地域全体での対策をお願いします。

（４）白葉枯病対策

令和 6 年産から富津市を中心に白葉枯病の発生が多く見られました。白葉枯病は細菌性の病気で、高温多湿条件で多発します。感染すると葉の両端から白く枯れ、穂実不良や稲体の枯死を引き起こし、拡大すると大幅な減収に繋がります。病原菌は水を介して伝染するほか、稲わらや雑草で越冬するため、発生したほ場周辺では来年も発生する可能性が高いと予想されます。

本病は感染後の防除が難しいため、箱施用剤や本田用殺菌剤による予防が効果的です。ルーチンコア箱粒剤や、オリゼメート粒剤などの適用剤を選択し、発生予防につとめてください。

また、本病気は多肥栽培によっても発生を助長します。多収品種を中心に発生が多く見られていることから、発生ほ場においては品種の変更や施肥量の見直しを検討ください。

（５）セーフティネット制度への加入

カメムシ類被害や高温障害、病気の発生による減収が散見されます。今年は米価が昨年よりも高くなりましたが、自然災害等様々なリスクに備えるため、ナラシ対策や収入保険など、セーフティネット制度への加入も御検討ください。

（６）多年生雑草（オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ）対策

これらの雑草の塊茎は低温や乾燥に弱いため、よく乾燥するほ場では冬季の耕うんにより塊茎を地表面に出して寒気にさらすことで、塊茎を枯死させることができます。これらが多発するほ場では、除草剤にかかるコスト及び作業量低減のためにも、耕種的防除を心掛けましょう。

(7) イノシシ等鳥獣被害の抑制

落穂や二番穂が残っていると、イノシシ等の鳥獣の餌場になります。いったん餌があることを覚えてしまうと、ほ場への侵入を繰り返すようになり、翌年の水稻被害につながりやすくなります。イノシシ等が侵入してくる地域で、稲刈り後にまだ耕起できていないほ場は、できるだけ早く耕起し、餌場にならないようにしましょう。

(8) 健苗育成のため温度管理

苗半作という言葉があるように、健苗育成が水稻栽培の第一歩です。水稻の育苗では、最適温度が育苗ステージによって刻々と変わります。図2を参考に適切な温度管理を実施しましょう。

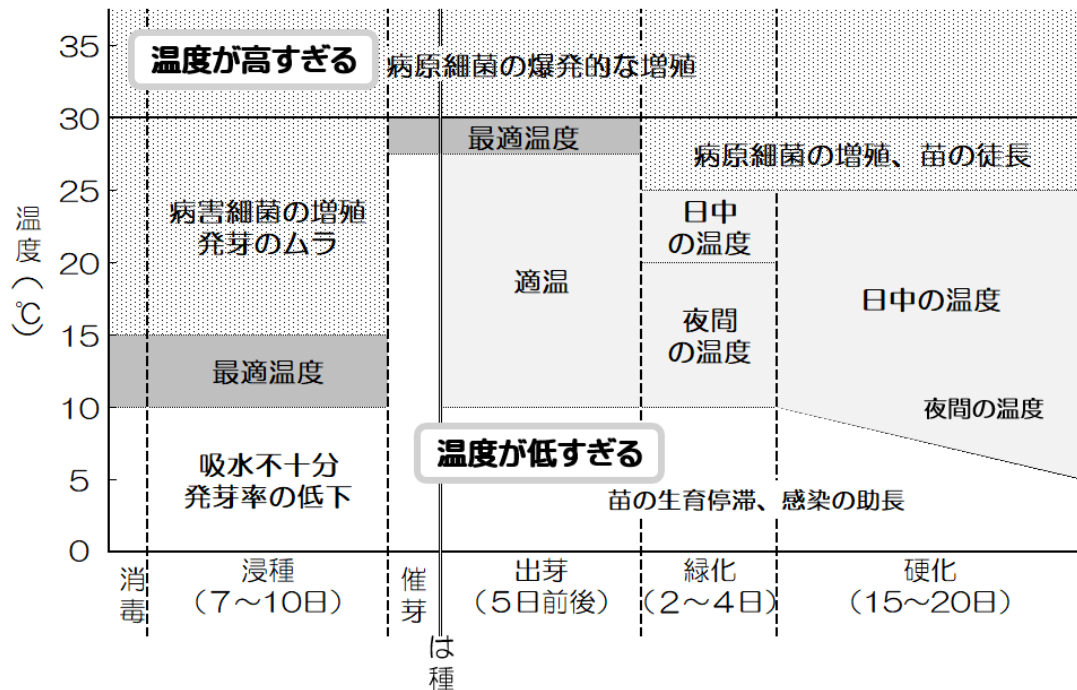


図2 育苗時の温度管理

4 種子保証票の保管について

種子保証票は、種子産地や種子生産者を確認できる、重要なものです。種子を原因とする事故が起きた時には保証票が必要になりますので、捨てずに収穫時まで大切に保管しましょう。

令和7年度の稲作では大変お世話になりました。来年以降も引き続きよろしくお願いします。
御不明な点等ありましたら、お気軽にお問合せください。

通信費削減のため、「あぜみち」の配信を、郵便から電子メールまたはFAXへの切替えを進めています。切替えを希望の方は、下記まで御連絡ください。
連絡先 石川（いしかわ） kimitu-f@mz.pref.chiba.lg.jp 0438-23-0299（電話）